

# 一遍上人と芸能民との距離

上 田 薫

## 要 旨

本稿では、『一遍聖絵』<sup>(1)</sup>や『遊行上人縁起絵』<sup>(2)</sup>などにおける貧民或は非差別民の描かれ方から、彼らと一遍との関係性について考察し、「捨聖」と呼ばれた一遍の思想が、諸芸能の隆盛に道を開いた所以について論じる。

## 1 一遍研究略歴と本論の目的

一遍についての研究は、遊行寺の発行する『時宗教学年報』が昭和47年から刊行され、金井清光・砂川博らが編集する『時宗文化』が平成12年より刊行されて、時宗研究の進展に大きく寄与して来たと言える。それより、遡って戦前には吉川清著『一遍上人』<sup>(3)</sup>『遊行一遍上人』<sup>(4)</sup>（共に昭和19年刊）がある他、同氏の『時衆阿弥教団の研究』<sup>(5)</sup>が昭和31年に刊行されている。更には、それよりも古く昭和13年刊になる京都時宗青年同盟編『一遍上人の研究』<sup>(6)</sup>があり、近代における時宗研究の嚆矢の一つと言える。しかしながら、一遍が、広く世に知られ、研究発展の契機となったのは、昭和30年に柳宗悦の『南無阿弥陀仏・一遍上人』<sup>(7)</sup>が出版され、昭和35年に角川書店より日本絵巻物全集『一遍聖絵』が刊行されたことに拠るところが大きいと思われる。その後、昭和52年に栗田勇の『一遍上人一旅の思索者』<sup>(8)</sup>が出て大きな反響を呼び、研究者のみならず、広く一般に一遍の名が知られるようになった。私個人としては、金井清光の『一遍と時宗教団』<sup>(9)</sup>（昭和51年刊）から非常に多くを教えられた。時宗研究は近年頃に進展著しく、橘俊道、大橋俊雄、今井雅晴、高野修など優れた研究者が輩出しているが、それでも一遍関連の文献は、親鸞や日蓮の研究文献の数に遠く及ばない。それは、時宗という教団の組織的な規模の問題や、一遍自身が著書を残さなかったこともその原因であろう。一遍という人は、日本の仏教史上特異な位置を占める僧である。上記のように昭和の中頃まで殆ど忘れ去られた存在であったが、その実一遍が残した時衆教団（=時宗という表記は、江戸時代の宗教統制以降使われるようになった。それ以前は時衆と表記された。）は、二祖の他阿弥陀仏真教によって時衆教団として組織され、鎌倉時代末から室町期にかけ

ては、全国の武士集団に近づき、陣僧或は同朋衆として日本人の葬礼や芸能の領域に計り知れない影響を与えたのである。

『一遍聖絵』及びその絵図の詳細な分析である『新版 絵巻物による日本常民生活絵引・第二巻』<sup>(10)</sup>（昭和59年刊）を見ると、その絵図には多様な職業の人々、芸能民、乞食、病者等が描かれている。例えば、市場での物売り、船頭、筏引き、馬方、牛方、狩人、荷持ち、狩人、鶺鴒、琵琶法師、絵解き、連歌師、山伏、遊女、乞食、病人などである。この中で、今日で言うところの芸能民は、琵琶法師、絵解き、連歌師、或は遊女などだろうが、それ以外に傘を持つ覆面の男や、僧形の人物などを、後に高野聖化する遊行僧と見ることも出来る。一遍は生前連歌師と深い親交を結んでいたことが『一遍聖絵』から分るが、一遍の死後は、能、絵解き、盲僧などの芸能民が時衆教団の周辺にあったことは多くの研究者の認める所である。

私は、時衆と芸能民との関係性を、例えば説経節のルーツを時宗史との連関から解明しようとするのではなく、説経節と時衆との近縁性を自明のことと認めた上で、一遍の死後、諸種の芸能が爆発的に開花し、能、狂言、説経節、浄瑠璃、歌舞伎などの伝統芸能として生き残った理由について考えてみようと思う。

## 2 差別の輪

先日、東京都東村山市にある国立ハンセン病資料館で三代目若松若太夫氏による説経節の公演を聞きに行った折、国立ハンセン病資料館が発行する『一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者～中世前期の患者への眼差しと処遇～』<sup>(11)</sup>（以降『一遍聖絵・極楽寺絵図』と表記する）という冊子を偶然手に入れた。これは国立ハンセン病資料館が来場者に無料で配布して

いる資料で、私も立派な冊子を無料で頂いて来たわけであるが、非常に考えさせられることが多かった。私のこの論考はこの冊子きっかけで起稿したものである。この本のサブタイトルは「中世前期の患者への眼差しと処遇」となっている。私はこの「患者への眼差し」という言葉が、非常に気になった。この冊子は、前半に鎌倉の極楽寺を再興した忍性の、貧民・癩病患者救済事業について、後半が『一遍聖絵』や『遊行上人縁起絵』に描かれた貧民・癩病患者についての資料と解説からなっている。

表紙には『遊行上人縁起絵』の尾張甚目寺での施行の様子が使用されているが、一言で言えば非常に衝撃的な絵と言え。私は勿論『遊行上人縁起絵』を何度も見ていたが、角川版『遊行上人縁起絵』の甚目寺の場面が縮小版且つモノクロ印刷であったため、この場面を良く確認できていなかった。ところが、『一遍聖絵・極楽寺絵図』が典拠とする遊行寺蔵の『遊行上人縁起絵』では、その場面がカラーで、折り返しを開くと場面の全体像を見ることが出来るようになっており、一遍や時衆の僧が屋内で食事をしてる外に、三つの円陣があり、一般の僧侶、乞食、癩病と思われる病者がそれぞれのグループごとに分かれて施行を受けている。左端の三つ目の円陣に集まっているのは、顔も体も爛れた病者、覆面の男、その近くには手に下駄を履いて這っている人などがいる。同じ人物は、東京国立博物館蔵の『遊行上人縁起絵』<sup>(12)</sup>では、足首から下が切断された姿に描かれている。寝床に敷く丸めた筵を背負っている乞食がいる真ん中の円陣には僧侶も混じっているが、同東京国立博物館蔵の『遊行上人縁起絵』では、真ん中の円陣は乞食、若しくは一般人の集団で、僧侶は混じっておらず、円陣ごとに、はっきりと身分が分けられている。

日本絵巻物全集版『遊行上人縁起絵』の図版解説は角川源義と宮次男が担当しているが、その甚目寺の欄には次のように書かれている。

「一遍の一行は関東から、東海道を上って、尾張国甚目寺に入った。その毘沙門天が靈験を示すことなどあって、人々皆不思議がったが、ここにおいて、大衆に飲食を施す齋会を催した。このことについては詞書は何もふれていないが、絵は大画面をもってその光景を描いている。一遍らの時衆は屋内で飲食するが、一般の僧、乞食、癩者と区別して食事する。このようなどころに、当時の社会通念が窺われて興味もたれよう。癩者については、破戒者が今生にておちる業病のように考えられており、この図はそれらへの救済を示すものとみることもできる。」<sup>(13)</sup>

とある。解説は「一遍らの時衆は屋内で飲食するが、

一般の僧、乞食、癩者と区別して食事する。このようなどころに、当時の社会通念が窺われて興味もたれよう。」と言うのであるが、私は「当時の社会通念」と「それらへの救済を示す」の間には、この両者を結ぶ一遍の「眼差し」=考えがなければならぬだろうと思う。この絵を素直に眺めれば、解説の説くように差別的な社会通念の容認と、施行という救済の両面が、言わばあるがままに描かれている。では、この時、一遍はこのはっきりと分け隔てられた身分をどのように受け止めていたのだろうか。

私はここでもう一つの絵巻『一遍聖絵』の方に目を転じてみる。『一遍聖絵・極楽寺絵図』の後半は、『一遍聖絵』に描かれた乞食と癩病者の場面を拡大して掲載している。そのどれもが『一遍聖絵』の中で一際目を引く場面なのであるが、それを改めて追ってゆく時、次のことに気がついた。即ち、乞食と癩病者が描かれるどの場面でも、一遍は彼等に対して特段の関心と注意を払ってはいないということである。

四天王寺門外に並ぶ土車(=乞食などが使った、車のついた移動式の小屋)で暮らす乞食の絵から始まり、京都因幡堂の縁下で病臥する乞食、佐久伴野の市場跡で犬を追い払っている裸姿の乞食、紫雲を拝む一遍らの後ろで同じ雲を眺める癩者、筵を背負った乞食たち、それから鎌倉入りを、時の執権北条時宗に拒まれた折の小舎人に追われる乞食の姿等が、非常に印象的であるが、それらどの場面においても、一遍は乞食や癩者と向き合っていない。一遍は熊野成道と呼ばれる熊野本宮での権現の託宣によって次の言葉を授かったとされているが、実はこの熊野権現の言葉こそが、一遍の一見冷ややかな病者への「処遇」を齎していると言えまいか。

「融通念仏勧むる聖、いかに念仏をば悪しく勧めらるるぞ。御房の勧めによりて、一切の衆生初めて往生すべきに非ず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定する所也。信・不信を選ばず、浄・不浄を嫌はず、その札を配るべし」<sup>(14)</sup>

ここで語られた自力の断念と、浄・不浄平等の思想に従うが為、一遍は「当時の社会通念」が選り分ける差別の輪に、一糸をも触れようとしなかったのではないか。一遍は、浄・不浄の現実における不平等にも、自力による貧民救済にも、ともに手を触れようとはしなかった。

### 3 忍性の救済

一遍が陸奥への遊行の帰路、念仏布教の旅を継続すべきかどうかを決するため鎌倉入りを試み、拒まれたのが弘安五年のことであった。それよりも二十年以上も前に、真言律宗の僧忍性は、幕府に請われて鎌倉の

釈迦堂という所に住み、また文永四年には極楽寺を再興して、貧民の救済事業に取り組んでいた。一遍は鎌倉に入ることが出来ず、現在の龍口寺付近の片瀬の地藏堂に踊り念仏の道場を作り、その年の春から夏の間、四月余りの間、必死の踊り念仏を練行した。片瀬の浜を立って向かった伊豆三島大社で時衆七、八人が死んだと言うから、片瀬の浜での踊り念仏が如何に厳しいものであったかが窺える。

ところで、現在の龍口寺付近から極楽寺までは四キロ程しか離れていない。この同じ年に、貧民救済について全く違った「処遇」をした二人が、恐らく互いを意識しつつ別の道を歩んでいたことは、私には非常に興味深く感じられた。図らずも、『一遍聖絵・極楽寺絵図』は、この両者を、ともに「中世前期の患者への眼差しと処遇」というテーマで捉えているのであり、私達が一遍、忍性両者の「眼差し」について考える機会を与えているように思うのである。

忍性という人は西大寺の叡尊門下の律僧で、西大寺での修業時代から手厚い貧民救済に当たっていたことが知られている。師叡尊や、その弟子である忍性には、篤い聖徳太子信仰があり、特に忍性は、太子によって開かれた四天王寺に当初より付属していた悲田院、施薬院、療病院などを模して、極楽寺に同様の施設を整えたほどだ。忍性という人には、一遍とは違い、世俗の権力を嫌わない柔軟性があった。幕府の招聘に応じて鎌倉入りすると、幕府の資金援助を得て着実に貧民救済の施設と方策を整えていった。師叡尊から「慈悲に過ぎたるひと」と呼ばれた忍性は、しかし、実際に生涯を貧民救済に費やした、まこと聖人と言うべき人であった。『一遍聖絵・極楽寺絵図』はその前半で忍性の生涯を紹介し、忍性の居た最盛期の極楽寺の伽藍図絵を載せている。かつては地獄谷と呼ばれた墓場のような谷が、忍性によって極楽に変じた様子を、我々はこの絵図から容易に想像することが出来る。湯殿や癩宿、病宿、療病院、施薬悲田院などの建物が描かれている。私は忍性の癩者に注がれる温かな「眼差し」に、何らかの濁りを認める気にはならない。同じ頃鎌倉にいて忍性を偽善者と呼んだ日蓮の見方に与することは出来ない。西大寺に居る頃より、奈良坂の癩病人を背負って町で乞食をさせ、夕方にはまた奈良坂に連れ帰ったという忍性に、隠された望みや、野心があったとは言われまい。

私はこの忍性の「眼差し」を、一遍の冷ややかな「眼差し」と向き合わせ、一遍が何故貧民とともにありながら、貧民に手を差し伸べようとはしなかったのか、考えねばならないと感じる。『一遍聖絵』に描かれている範囲では、一遍が親しく接しているのは、臨終に立ち会った連歌師の花下の教願のみである。時衆と連歌師は、この一遍と教願の関係以来、深い繋がりを保

ち続けているが、他の芸能との関係については不明な部分も多い。

先に触れたように、『一遍聖絵』では、琵琶法師、絵解きなどはその姿から存在を確認できるが、それ以外の諸種の口承芸能については、その姿から芸能を特定することが難しい。一遍の臨終の場面では、絵解きの僧と蓬髪（はな）の男、高野聖風の三足付の笈を背負った男の一群が描かれているが、これは何れも何らかの芸能に携わる者達であろうと思われる。一遍死後の展開としては、能の「誓願寺」には一遍が、「遊行柳」には遊行上人が登場することをみても、何らかの近縁性があり、説経節では、「小栗判官」に遊行上人が、「苅萱道心」は一遍と聖戒父子をモデルとしているという五来重の指摘<sup>(15)</sup>があるように、その関連性が認められる。その他、説経節は、物語の舞台が一遍や時衆の活動拠点と重なる地名が多く登場していることも、その関連性を考察する傍証とすることが出来よう。太宰府(「苅萱道心」、熊野湯ノ峰(「小栗判官」、高野山(「苅萱道心」、四天王寺(「俊徳丸」、善光寺(「苅萱道心」)などは、何れも『一遍聖絵』に描かれた、一遍の重要な活動拠点であった。一遍と諸種の芸能民との繋がりを暗示する傍証は頗る多いが、では一体どうして、一遍の遊行の周辺に諸種の芸能民が集まり、また派生していったかということ、次に考えてみたい。それには、一遍の熊野成道以降の思想について考えてみる必要がある。

### 4 一遍の思想

一遍の思想は『一遍聖絵』と『一遍上人語録』<sup>(16)</sup>に残された言葉から十分に窺い知ることが出来る。既に触れた熊野成道での「御房の勧めによりて、一切の衆生初めて往生すべきに非ず。阿弥陀仏の十劫正覚に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定する所也。」という他力の透徹は、それだけで一遍の「眼差し」の冷ややかさに通じるものを持っていると言うことも出来る。また、『一遍上人語録』には、度々「自力我執」<sup>(17)</sup>と「我執驕慢」<sup>(18)</sup>という言葉が出て来て、自力で他者を救うという意識が退けられている。所収の和歌などを読んでみても同じである。

心をばこころ（こころ）の怨とこころえてこころのなきをこころとはせよ

一遍の思想の根幹は、この歌に詠まれているように、自我の心を停止させることにある。同語録に「捨よ」といふは自力我執なり」<sup>(19)</sup>ともある。また、『撰集抄』にある空也上人の「捨てこそ」という言葉を引いて「念仏の行者は智恵をも愚痴をも捨、善悪の境界をもすて、貴賤高下の道理をもすて、地獄をおそる心をもすて、極楽を願ふ心をもすて、又諸宗の悟りを

もすて、一切の事をすてて申す念仏こそ、弥陀超世の本願に尤もかなひ候へ。」<sup>(20)</sup>とも語っている。こういう「捨聖」の「心」が如何に孤独であるか、一遍はそれを殆ど口に出さなかったが、

おのづから相あふ時もわかれてもひとりはいつもひとりなりけり<sup>(21)</sup>

ひとりただほとけの御名やたどらんおのおのかへる法の場人<sup>(22)</sup>

こうした歌に一遍の心情が滲み出ているように思われる。これが大勢の時衆を引き連れて一人になる時とてなかったであろう一遍の孤独であった。私はこうした孤独、若しくは覚悟を一遍の冷ややかな「眼差しと処遇」に認めねばならないと考える。もう一度、『一遍聖絵』に戻って考えてみたい。鎌倉入り失敗の後、片瀬の浜で上総の生阿弥陀仏と再会し、地藏堂で長期の踊り念仏を行なった場面である。絵巻物の前景(右側)には片瀬の館と呼ばれる場所で生阿弥陀仏に十念を授ける様子が描かれている。そして、次に後景(左側)には地藏堂での踊り念仏の様子が描かれている。地藏堂での踊り念仏は二階建ての槽状の舞台の上で、必死の形相で踊っている一遍と、時衆の僧たちの姿がある。この踊り念仏については後で触れるが、私はいま、片瀬の館と地藏堂の間に描かれた乞食たちの場面に注目したい。細い柱を立てて、板や筵で屋根を載せた粗末な掘建て小屋が十三程あって、蓬髪裸体の乞食や、癩者と思われる覆面の男、女と思しき乞食、死んでいるようにも見える黒変した男の乞食などが描かれている。こうした場面は、『一遍聖絵』では、何度も現れる場面と言えが、私はこの場所より四キロ余りしか隔たっていない場所に、忍性の極楽寺があったことを想起する時、この場面には、同様に乞食たちが描かれる他の場所にはない特別の意味が加わるのではないかと考えられる。

## 5 宗教と医療・福祉

先述の通り、忍性の極楽寺は極めて大規模な貧民・病者救護施設であって、当然乞食、病者たちは希望すれば極楽寺の施設に入ることが可能であったと考えられる。極楽寺に行けば、食事も与えられるし、入浴も出来るし、治療も受ける事が出来た。尤も、その時代の治療がそれほど有効でなかったことは想像に難くないが、宿泊施設で様々な救護を受けられるのに、野宿に近い掘建て小屋で彼等が暮らすどんな理由があったのだろうか。勿論『一遍聖絵』に描かれた貧民が、極楽寺に入れなかった者たちだという可能性もあると思う。しかし、それは要するに極楽寺における忍性の

活動の限界を示すものという事が出来る。更に、極楽寺という収容施設での暮らしが、貧民・病者にとって文字通り「極楽」世界と言えたのかどうかということを考えねばなるまい。極楽寺での貧民救済の実態は良くわからないが、『一遍聖絵』の片瀬の場面に貧民・病者の小屋が描かれていることが物語るのは、彼等が極楽寺に居られない、或は居たいと思わない理由があったということである。

癩病やその他の重病を治療する医療のない中で、忍性の行なった救済活動は現代にもまして真心のこもったものであったと思われる。忍性は感染を恐れた当時の偏見を物ともせず、直接患者に触れて介護を行っていたとされている。たとい、そうした施術が治療につながらなかったとしても、その行為そのものは非常に崇高なものであったと言わねばなるまい。ただ、私がここで考えたいのは、それが例えば、現代のような高度な医療技術の整った時代であっても、身体的な治療というものは、人間の生の多様で全体的な意義や欲求の充足について言うならば、その一部しか補償できないという事である。ここに、一遍が貧民の現実的な救済に向かわなかった意味、更には宗教が政治や社会福祉とは別の活動である意味がある筈なのである。一遍、忍性と同時代に日蓮も生きていたのであるが、日蓮のように宗教と政治を結ぼうとした宗教家もあった。忍性は政治権力との距離において、丁度一遍と日蓮の中間に位置する存在で、だからこそ、中世という時代の制約の下で、現実的で具体的な人間救済活動を行うことができた。しかし、日蓮や忍性の方向にのみ宗教の意義を求めると、宗教は早晚、政治と科学に取って代わられてしまう。もし、稀に見る善政が行なわれて、理想的な社会福祉が実現すれば、貧民救済という面で宗教は必要なくなる。また現代が既にその段階にあると言っても良いが、当時医王如来と呼ばれた忍性であっても、患者の治療においては医学の進歩した今日の医者に遠く及ぶまい。しかし、私は宗教というものは、どれほど社会福祉の理想が実現した時代であっても、またどれほど医学が進歩した時代であっても、精神的な救済を行い教える存在として他に代える事の出来ない意義を有していると考えられる。私は忍性の活動にはこの精神的な救済も含まれていたと信ずるが、極楽寺という一種のユートピアは、生の全体から切り離された小さな病院または収容所なのであって、そこは本来、決して生を終わる最良の場所ではなかったのではないと思われる。

## 6 一遍の「眼差しと処遇」

極楽寺は言わばその時代に望み得る最高の病院であった。だが、それがどんなに居心地の良い病院であっ

ても、できるなら病院で暮らしたくはないだろう。私はここに一遍が貧民や病人を囲い込まず、彼自身の放浪の人生に従う事も、離れる事も自由に任せた理由があると思う。乞食たちは、時衆がその旅の行く先々で得た食事の幾分かを、ただ当たり前のように分け与えられていた。その、一遍の乞食する者に対する距離感が、言ってみればそれぞれに窮する人々に、自力で生きてゆく道を拓いたのではないかと思われる。貧民や病人たちの中の、意外なほど多くの人々が、どれほど困難で、苦しい生活であっても、出来うる限り自由に生き、出来うる限り自立して生きることを望んだのではあるまいか。そして、一遍の周辺にいた多くの乞食や病人たちが、そこに集まる人々の撃みに倣い、生きてゆくために、様々な芸能を身につけていったのではないだろうか。事実、中世における芸能の隆盛は特記に値する。鎌倉時代を経て、今日の伝統芸能の殆どが室町期に開花するが、その芸能の担い手の多くは、貧民であり、非差別民であり、身体に障害のある者たちだった。私はこの中世期における芸能の隆盛と、一遍以降の時衆の活動が深く結びつく理由を、一遍の困窮者に対する「眼差しと処遇」に負うところが少なくないと考えている。一遍は、三十六歳で家を捨て遊行の旅に出てから、言わば最底辺の乞食の人生を生き、彼は世間に食を乞い、家もなく放浪するという生において、時衆の後を追って来た貧民と変わる所がない。一遍は自ら乞食や、病者、放浪の芸能民と同じ立場に身を置き、祈りそのものである踊り念仏を練行する事によって、「南無阿弥陀仏」と仏に祈るより他に救われる道がない事を示したのである。片瀬の浜での必死の踊りは、一遍の「救い」という難問への答えだ。宗教の本質は「祈り」である。福祉でも、医療でもない。「祈り」なのだ。仏教においては「祈り」は仏に向けられる「祈り」であり、仏とは、最高の智慧、最高の目覚め＝覚醒を意味する。だから、宗教は『法華経』が説くように、菩薩行として行なわれねばならないのであり、一遍は阿弥陀三部経の教えに従って、「南無阿弥陀仏」と称え、祈ることを宗教の根幹だと教えたのである。念仏は、だから最大の行であると同時に、最小の行でもありうる。どれ程、困窮し、苦しんでも、「南無阿弥陀仏」という最高の行は、万人に平等に開かれている。「南無阿弥陀仏」は誰も拒まないし、病院のように満室になる事もない。全ての人に開かれている最高の教え、それが「南無阿弥陀仏」なのだ。これが一遍の最も深い思想である。だが、私は「南無阿弥陀仏」の代わりに「南無妙法蓮華経」と称えても同じだと思う。それは、どちらも仏の智慧を呼び出す呪文であるから。日蓮は他宗を誹謗して止まなかったが、一遍の「時衆制戒」には「専ら所愛の法を信じて、他人の法を破ることなかれ」<sup>(23)</sup>とある。専ら自分の

信じる教えを信じて、他宗を誹謗してはならないという意味である。仏教の優れている所は、仏が人格神ではないところだと私は思っている。仏の智慧は深淵で、容易に近づけるものではない。しかし、仏教においては、智慧は完成されているのであり、一切恣意的に変えられる事はない。そして、その智慧を開く方法は、極めて容易な言葉を称えることなのであって、それは万人に常に開かれている。だから、人はその扉を開いて、仏の智慧にいつでも触れられるようにすれば良い。『法華経』にも「一偈を聞かば皆成仏せんこと疑なし」<sup>(24)</sup>とある。繰り返す説かれている。しかし、少なくともその智慧に触れねばならないのである。施しや、介護を受けることは、宗教ではない。施しや、介護を与える事も、それだけでは宗教ではない。宗教は、特に、仏教においては智慧に触れることが宗教である。精神が少しでも目覚める事が宗教である。それは、祈りによって開かれる道だ。だから、一遍は「南無阿弥陀仏」を称える。「南無阿弥陀仏」は智慧の扉を開く鍵なのだ。一遍はこの鍵だけを与える。その先は、仏の智慧の領域だからである。一遍は、自らが最底辺の境涯に身を置く事によって、どれ程貧しくとも救われる道がある事を示したのである。一遍は決して地上のユートピアを夢想しなかった。もしそういうものがあつたとしても、恐らくそれは高級なホスピタルのようなものでしかないだろう。どんなに手厚いサービスを受けても、人間は一ミリも賢くはならない。先ず知恵の扉を開くこと。ここに、どんな悪条件であっても自力で生き、自ら人生の意義を知る道が開かれるのである。

## 7 まとめ

私は同時代に生きた一遍と忍性の貧者への「眼差しと処遇」という視点を比較することから、一遍の開いた時衆教団が諸種の芸能が開花する一因を内在させていたことを論じた。それと同時に、一遍と忍性の活動の違いは、宗教と政治、医学(科学)との本質的な違いを考える糸口を与えている事にも触れた。宗教について考える事は、今日何らかの方法論を持たなければ、成り立たない課題だと思われる。かつて宗教が実践して来た人間救済は、今日の社会福祉制度の充実や、医学の進歩によって、その役割を終えつつある。宗教的な奇跡とされていた事を、医学は確実に実現してしまっている。このような現実を踏まえた上で、宗教の意義というものを考えねば、宗教は単にその歴史的な役割を終えたということになろう。しかし、実は社会福祉と医学が宗教のかつての役割を果たしている今だからこそ、宗教を本質的に問い直す事が可能になったと考えることも出来るだろう。一言で言えば、宗教は

精神の覚醒に扉を開く行い（祈り）の事である。これは、別に稿を起こして十分に論じられねばならないが、この論考においては、一遍の貧者への「眼差しと処遇」が、現代の社会福祉や医学が分担する身体的補償ではなく、現実の人生における精神の自由に開かれたものであることを論じた。時衆教団とともに、開花し成熟していった中世から近世にかけての伝統諸芸能の歴史は、貧者の自立の歴史ということも出来る。これは一遍の透徹した宗教意識と無縁の出来事ではないと私は考えている。

#### 参考・引用文献

- 1 新修 日本絵巻物全集11『一遍聖絵』角川書店 昭和50年刊
  - 2 日本絵巻物全集23『遊行上人縁起絵』角川書店 昭和43年刊
  - 3 吉川清 著『一遍上人』紙硯社 昭和19年刊
  - 4 吉川清 著『遊行一遍上人』紙硯社 昭和19年刊
  - 5 吉川清 著『時衆阿弥教団の研究』藝林社 昭和31年刊
  - 6 京都時宗青年同盟編『一遍上人の研究』丁子屋書店 昭和13年刊
  - 7 柳宗悦 著『南無阿弥陀仏・一遍上人』春秋社 昭和35年刊
  - 8 栗田勇 著『一遍上人一旅の思索者』新潮社 昭和52年刊
  - 9 金井清光 著『一遍と時宗教団』角川書店 昭和51年刊
  - 10 澁澤敬三・神奈川大学日本常民文化研究所『新版絵巻物による日本常民生活絵引・第二巻』平凡社 昭和59年刊
  - 11 国立ハンセン病資料館 編集・発行『一遍聖絵・極楽寺絵図にみるハンセン病患者～中世前期の患者への眼差しと処遇～』平成26年刊
  - 12 東京国立博物館デジタルライブラリー参照
  - 13 日本絵巻物全集23『遊行上人縁起絵』角川書店 昭和43年刊 P.86
  - 14 新修 日本絵巻物全集11『一遍聖絵』角川書店 昭和50年刊 P.359
  - 15 五来重 『熊野詣』講談社学術文庫 平成16年刊P.91
  - 16 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊
  - 17 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.72
  - 18 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.85
  - 19 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.78
  - 20 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.34-35
  - 21 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.59
  - 22 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.59
  - 23 『一遍上人語録』岩波文庫 昭和60年刊 P.22
- 10 日本大学芸術学部紀要 2017